



Title	<翻訳>女性とリベルティナーージュ : 危険な関係?
Author(s)	ブラン, ラファエル; 山上, 浩嗣
Citation	Gallia. 2024, 63, p. 137-151
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95765
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

女性とリベルティナージュ：危険な関係？¹⁾

ラファエル・ブラン
(山上浩嗣訳)

ジャン・スタロバンスキーは18世紀のリベルティナージュ *libertinage* [色恋、放蕩] を、「自由に関する可能な経験²⁾」のひとつと定義した。「根本的な不服従³⁾」を希求し、宗教的・道徳的規範による制約を脱し、束縛や障害なしに享楽を得たいという意志を表明する——そのようなりベルタンは、解放への欲求を抱いているように見える。しかし、近年の学術研究は、リベルティナージュの暗い面への認識を促す傾向にある。しばしば「価値の本質的な不定性⁴⁾」の上に構築されるエクリチュールに注目するのだ。そうした研究はまた、ジェンダー・スタディーズの成果を取り入れ、現代のフェミニズムによる要請に共鳴することで、リベルタンの想像力の原動力ともなる暴力性（その暴力性は洗練された形式に隠されてはいるが）に関心を向けている。あわせて、寛大すぎるとみなされる伝統的な歴史学への批判もしばしば行われている。男女の共犯・共謀の作用という見方を離れ、より俯瞰的な視点を導入することで、リベルティナージュを女性を主たる被害者とする抑圧の道具とみなすのである。

今やリベルティナージュは、解放への期待から遠くに追いやられ、根本的に不平等な社会的・道徳的秩序への加担者とされてしまっていないだろうか。こうして、誘惑という複雑なゲームや、欲望の表現に好適な^{コト}約束事を男女が共同で統制する状態が、軍隊や狩猟の比喩の反復的使用が表現するシニカルな捕食と対置されることになる。誘惑の対象としての女性は、攻囲された領地、征服されるべき要塞、狩りの獲物となるだろう。支配と服従の関係や暴力は、(愛のとまでは言わずとも) エロスの実践の中心に位置するようになるだろう。そして、欲望の対象としての女性による抵抗は、刺激や挑発となるだろう。たとえば、『危険な関係』のメルトゥイユ侯爵夫人に宛てた第23信で、トゥールヴェル法院長夫人について、ヴァルモン子爵はこう語る。

1) 本稿は、2023年5月25日にラファエル・ブラン氏が大阪大学豊中キャンパスで行った同題の講演の原稿に加筆修正を施した論考の翻訳である（原文も本誌に掲載）。いくつかの改行は訳者の判断による。なお、講演会は大阪大学フランス文学研究室が主催し、当日の通訳も訳者が務めた。

2) Jean Starobinski, *L'Invention de la liberté. 1700-1789*, Paris, Gallimard, 2006, p. 15.

3) *Ibid.*

4) Florence Magnot, «Relire les scènes de séduction chez Crébillon fils par le prisme proxémique : pour une microlecture du style des gestes en contexte libertin», *Dix-Huitième siècle*, n° 55, 2023, p. 269-284, p. 269.

いざ、わが軍門にくだれ。されど戦え。たとえ自分を克服する力がなくとも、彼女は抵抗する力を持たねばならない。彼女に自分の弱さをゆるゆると味得させ、せっぱつまって兜をぬがせたい。鹿をだまし討ちにするのは卑しい密猟者のわざ。真の獵人たらんものは、すべからく鹿を手取りにしなければならぬ⁵⁾。

このように見ると、解放のための言説は単なる建前となり、しばしば表明される意図（偏見からの解放、快樂の男女共同学習）と、リベルタンのより両義的な関心との間のギャップについての検討が課題となる。こうして、リベルティナージュが男女平等、あるいは少なくとも享樂における両性の相互依存性を保証する可能性、つまり、リベルティナージュの享樂の解放者としての可能性は、絶滅とは言わないまでも、深刻な被害を受けることになるだろう。

さまざまなリベルタン文書（異質なものの混淆なので、単純な読解の対象にはなりえない）の解釈をざっと概観しただけで、そこにはきわめて対極的な二つの特徴が明らかになる。ひとつは、リベルティナージュにいくぶん無邪気な遊戯の形式を見る読解である。そこでは、パートナーの双方はそれぞれ何をすべきかをわきまえていて、自分の役割を果たす。たとえば、ジャン・ウダールは、クレビヨンの『夜とひととき *La Nuit et le moment*』について次のように評している。

テキストは、あたかもパ・ド・ドゥ [二人で行うバレエのステップ] のようにして、限らない優雅さと繊細さをともないつつ行程を進めていくが、真の障害や波乱には出会わない。テキストは、登場人物も読者もいっしょに、全員が当初から——メトロノームのように正確なリズムで——そこに至るだろうと想像するまさにその場所へと、抗いがたく向かっていく⁶⁾。

つまりウダールは、登場人物同士が本来的に共謀していて、物語の暗黙の前提をたやすく解説しようと主張している。彼はさらに、「二通りに解釈しうるこの世界で、[人物たちの意図や行動が] これほどたやすく理解されたためしはない⁷⁾」と述べている。フィリップ・スチュワートは『マスクと言葉』でより詳しく述べる。リベルタンは「犠牲者ではなく、共犯者を生み出す。女性は誘惑されるのではなく、自発的に、意識的に行動する⁸⁾」と。他方、現代の読解は、以上の楽観的で安心な読解とは正反対である。それは、男女平等、性暴力の問題、「合意 consentement⁹⁾」という概念など、社会の新たな検討課題の発展にともなって生じ

5) Lacos, *Les Liaisons dangereuses*, éd. Catriona Seth, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2011, p. 63. ラクロ『危険な関係』伊吹武彦訳、岩波文庫、1965年、上、76頁。

6) Jean Oudart, « Introduction à *La Nuit et le moment* », in Crébillon, *Œuvres complètes*, Paris, Classiques Garnier, 2000, t. II, p. 502.

7) *Ibid.*, p. 503.

8) Philip Stewart, *Le Masque et la parole : le langage de l'amour au XVIII^e siècle*, Paris, J. Corti, 1973, p. 100.

9) たとえば次を参照 : Manon Garcia, *La Conversation des sexes. Philosophie du consentement*,

てきたものだ。そうした現代の読解は、文章の誘惑の力や、リベルタンの魅惑的で詭弁的なレトリックにごまかされないように警告し、巧みに編成されたテキストに警戒のまなざしを投げかける。

この重大な転換は、近年行われたいくつかのシンポジウムによって明らかになっているが、そこには、リベルタン文書を政治的に読み解く試みがともなっている。文献研究のいわゆる中立性という考えに満足するのではなく、(戦闘的とは言わないまでも) 政治的な使命を、作品の歴史的・文化的な状況を考慮に入れる学術的な要請へと結びつける動きが見られるのである。これらの成果の大部分は、躊躇なくテキストを「現代化する actualiser」解釈¹⁰⁾ (イヴ・シトン) の適切性を主張する。それは、もはや必ずしも著者が「望んだ」意味を復元するのではなく、解釈者が置かれているコンテキストやその他の状況に応じて、作品に事後的に意味^{ア・ポストオリ}を授ける試みである。作品とその「イデオロギー的」内容との関係や、学校で作品をいかに教えるかという問題については、ここ数年定期的に論争の対象となってきたが、これにより、検閲、ポリティカリー・コレクトネス、時代錯誤、さらには文学のいわゆる「神聖さ」の亡霊が出現しつつある。

以上の転換により、豊かな検討の可能性が拓かれた。もっとも、この現象は、個別具体的な抵抗に直面するとともに、方法論に関わる次のような批判的な問いを提起する。

文学の効果やその道具としての力を強調することを目的として、文学に説明を求めべきか、つまり、文学を道徳的価値という基準で評価すべきか。

近年の読解は、旧体制時代の物語に対して現代的解釈という枠組みをあてはめることで、横暴な脱文脈化を行っていないだろうか。

テキストによって生み出される、または明示的に探求される共感の効果をどのように測定し、解釈すべきか。

上に示した読解方法の二極化によって、テキストにさまざまな解釈可能性を与えるよりもむしろ、解釈の一元化の危険を冒してしまうのではないか。

——このような問いである。

リベルティナージュ：問題含みのカテゴリー

リベルティナージュは、一定の明確な定義を欠いた曖昧なカテゴリーであり、それゆえ要因も様態も多様なさまざまな現象を指示するのに役立つ。こうして、ジャン＝クリストフ・アブラモヴィチは、それは「概念」としてよりもむしろ「価値の尺度」、つまり「変動する評価」の基準として理解されるべきであると指摘している¹¹⁾。

Paris, Climats, 2021 ; ou Geneviève Fraisse, *Du consentement*, Paris, Points Essais, 2022.

10) 次を参照 : Yves Citton, *Lire, interpréter, actualiser. Pourquoi les études littéraires ?*, Paris, Éditions Amsterdam, 2007.

11) Jean-Christophe Abramovici, « Libertinage », *Dictionnaire européen des Lumières*, dir. Michel Delon, Paris, Presses Universitaires de France, 1997, p. 646-649, p. 647.

たとえば、進んでみずからを「偉大なりベルタン¹²⁾」と規定するカサノヴァは、この用語をゆるやかな意味で使用している。彼が晩年に書いた自伝『わが生涯の物語』では、リベルティナーージュを十全に尊重しているが、それはこの語が解放を指示し、享楽の能力の洗練された活用法を意味するからである。他方で彼は、放蕩者 *débauché* のような冷淡で計算高い誘惑者の姿を拒否する。行き過ぎた無味乾燥なシニスムを断罪し、いかなる感情もともなわない享楽には魅力を感じないとくり返し語る。「愛のない愛の快楽は味気ない¹³⁾」と。したがって、男女間の攻撃的な戦争という手段をとらない「感情の交換¹⁴⁾」という地平は残るだろう。とは言え、カサノヴァにとって、「常習的な誘惑者」は、「忌まわしい男、自分が目を付けた対象の本質的な敵¹⁵⁾」であったとしても、彼がなしとげた征服の一部が狩猟の性質を帯びていること（ときにそれは明白に自覚されている）を隠すことはできない。カサノヴァは『わが生涯の物語』の多くのページで享楽の平等という理想を擁護しているにもかかわらず、状況次第で彼は力づくで相手をものにしようとする。フランソワーズ・ジルは、このヴェネツィア人の自伝的語りに対する共感的で素直な読解に抵抗し、早くも1998年に、純粋な著者の視点から距離を取るべきだと呼びかけた。

カサノヴァは、相手をつかまえ、享受し、解放する。彼は、自分が生み出したのは、純潔を失った処女であれ練達の熟女であれ、幸福な女たちだけであり、彼女らはみな今後彼を祝福しながら生きていこうと信じていた。[...] カサノヴァの回想録は一面しかない。それは彼の見ている面である¹⁶⁾。

同様の曖昧さは、レチフ・ド・ラ・ブルトヌヌの自伝的物語『ムッシュ・ニコラ』にも見られる。「優しく繊細な¹⁷⁾」性格で、相手を「つねに丁寧に愛した」と自画自賛しながらも、彼は自分の感傷的な気質のゆえに、かえって欲望の強烈な衝動に屈してしまうことを強調している。「私はつねに激しい情念、激烈な気質とともに、想像しうるかぎり最も温和な心を保持してきた¹⁸⁾。」「愛や女たちへの真の反感」を抱くリベルタンは、レチフには自分とは正反対の存在に見える。そのことは、次の素朴な疑問によって簡潔に表現されている。

私たちはなぜ一世紀もの間、女性に対して誠実ではなく、ただ人間としてふるまうことを誇りとしうるような、またそれを誇りとしなければならない

12) Casanova, *Histoire de ma vie*, éd. G. Lahouati et M.-F. Luna, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2013, t. I, p. 905.

13) *Ibid.*, t. I, p. 480.

14) Marie-Françoise Luna, « Du 'je' libertin », in J.-F. Perrin et Philip Stewart, *Du genre libertin au XVIII^e siècle*, Paris, Desjonquères, 2004, p. 242-261, p. 248.

15) Casanova, *Histoire de ma vie*, *op. cit.*, t. III, p. 999.

16) Françoise Giroud, « Admirable, Casanova? », *Le Nouvel Observateur*, jeudi 5 novembre 1998.

17) Rétif de la Bretonne, *Monsieur Nicolas*, éd. P. Testud, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1989, t. II, p. 451.

18) *Ibid.*, p. 494.

ような男たちとともに生きているのか¹⁹⁾。

もっとも、『ムッシュ・ニコラ』は、性暴力の問題を無視してはいない。いくつかの強姦の場面が、上記とは対照的な語りによって叙述されている。そうした場面は読者に、そこで生み出される作家の自己表象のありかたについて検討するように促すのである。

女性のリベルティナーージュ

あらゆる「不作法 impertinences」（この語は18世紀を通じて好んで用いられた）を許容する欲望の対象として、女性たちは、リベルティナーージュの主たる犠牲者であった。しかしながら、女性たちはまた、リベルティナーージュの動作主あるいは主体でもありえた²⁰⁾。（[女性のリベルタン存在を示唆する] «libertin, ine» という項目を導入した）当時の辞書は、リベルティナーージュの女性的極点と男性的極点の均衡を保とうとしているように見えるが、リーニュ公²¹⁾はむしろ、「リベルタン *libertin*」と「女リベルタン *libertine*」という二語の間にある意味上・指示対象上の不均衡を指摘している。次は、彼が『回想録、書簡、思想』のなかの「リベルタンと放蕩者 *Libertin et débauché*」という項目で説明していることだ。

女性において、この称号〈女リベルタン *libertine*〉は最も忌まわしいものの集積である。[...] 色恋 *galanterie* のために、多くの愛人をとっかえひっかえしたり、娼館に夜食に訪れたり、そこで乱痴気騒ぎをしたりといったもっと罪深い状態に陥る女性は、おそらく放蕩女 *débauchée* と呼ばれるだろうが、女リベルタンの階級ほどおぞましくはないだろう。女リベルタンの階級とは、メッサリナ²²⁾ や「城壁の女たち *coureuses de rempart*」[娼婦のこと]の階級だ²³⁾。

18世紀を通じて、女性のリベルティナーージュはしばしば売春と同一視された。つまり、身体が多かれ少なかれ強制的な商行為である。ほかの人物たちは、これに反してもっと好意的に扱われている。たとえば、クレピヨン『心と精神の迷い *Égarements du cœur et de l'esprit*』におけるリュルセー夫人は、経験豊かな女性であり、若き愛人メリクールを入門したての新たな世界の奥義へと導く。ヴィヴァン・ドノン『明日はない *Point de lendemain*』のT夫人もまた性の手ほどきに長け

19) *Ibid.*, p. 461.

20) たとえば次を参照：*Femmes et libertinage au XVIII^e siècle*, sous la direction d'Anne Richardot, Presses Universitaires de Rennes, 2004. 本書は、リベルティナーージュの女性の側面、「影に覆われた」側面を復元しようと試みている。

21) [訳注] リーニュ公（シャルル＝ジョゼフ）：1735-1814年。ハプスブルク帝国・オーストリア帝国の元帥、著述家。ウィーン会議を「会議は踊る、されど進まず」と評した。カサノヴァの晩年に知り合い、リーニュ公はカサノヴァの回想録を読んだ。

22) [訳注] ウァレリア・メッサリナ：20-48年。ローマ皇帝クラウディウスの皇妃。極度に性に奔放な女性と伝えられている。

23) Charles-Joseph de Ligne, *Mémoires, lettres et pensées*, éd. A. Payne, Paris, Bourin, 1989, p. 799.

た女性だが、自身の社会的評判は保持したままで、色恋において男性のライバルたちと張り合う。さらに、『危険な関係』のメルトウイユ侯爵夫人や、また異なるタイプだが、サドの登場人物であるジュリエットも挙げられる。これらはいずれも強い女性たちで、身体と精神の解放を主張し、あるいは要求するが、その際たいてい、性的な有能さと知的な熟練を兼備している。

しかし、これらの解放された人物たちは、しばしば曖昧さの印が付されている。女性という性にのしかかる社会的、道徳的、さらには生物学的な法則から（少なくとも部分的に）逃れることで、彼女らは、ジェンダーの規範を転倒させるのに貢献する。ただしその場合、たいてい社会的制裁につながる逸脱、さらには異常とみなされる危険をとまなう。彼女らの解放や反抗はたいてい個人的なものであり、例外的な存在として語られることが想定されている。そうして、真に代替的なリベルティナーージュの可能性の条件が問われることになる。すなわち、既存の秩序と支配・服従の関係を転覆させようなりベルティナーージュの可能性である。

ここでは二人の女リベルタン *libertines* について概観しよう。ラクロ『危険な関係』のメルトウイユ侯爵夫人と、カサノヴァ『わが生涯の物語』の修道女 M.M. である。前者は、ラクロの小説に対する正反対の解釈の中心をなす。彼女を「女性の名誉を回復し」男性を「支配する」ために生まれた原始フェミニスト的ヒロイン、すなわち、勝利する男性としてのおのれの立場に安心しきったヴァルモンのような人物のリベルティナーージュの幻想を破壊し、社会秩序の^{ダブル・スタンダード}二重基準を告発するヒロインとみなすべきだろうか。これは『危険な関係』第 81 信の教訓の一部である。ここでは、誘惑は「不公平な」勝負、バイアスのかかった勝負として描かれる。メルトウイユはヴァルモンにこう語る。「女の幸運は負けないこと、男の不運は勝たないことです²⁴⁾。」男性にはすでにすべてが与えられているのに、女性はすべてをこれから獲得しなければならない。メルトウイユ侯爵夫人が女性に課された隷従や疎外から逃れたことを喜んだのは、彼女の意志の並外れた働きによるのである。

他方、別の解釈は、ヒロインであるメルトウイユ侯爵夫人が他の女性たちと根本的に異なっていることを強調する。侯爵夫人は他の女性たちとの絆を断ち、彼女らに対して甚だしい軽蔑をさへ公言しているという。この解釈は、侯爵夫人の男性化を明示している。彼女は躊躇なく、男性リベルタンたちと同じ武器を使用し、自己の全能性という幻想を誇示しているのだ。彼女の行動は、かくも多くの「現代のサムソン」を脅かす「新たなデリラ²⁵⁾」の行動になぞらえることができるのではないか²⁶⁾。天然痘によって醜くなってしまった女リベルタン[メルトウイユ

24) Laclos, *Les Liaisons dangereuses*, op. cit., p. 203. 『危険な関係』前掲書、上、254 頁。

25) [訳注] サムソン：イスラエルの士師のうち最後の、最も特色のある人物で、その生涯についても詳しく記されている（士 13-15 章）。ダン族に属するマノアの子で、誕生のときからナジルびととして神にささげられた。彼の一生はベリシテびととの戦いであったが、神の力を与えられて多くの勝利を得た（ヘブ 11:32）。しかし最後にデリラとの愛に惑わされて神の力を失った。彼の死は悲惨であった。（『聖書辞典』新教出版社）

26) Laclos, *Les Liaisons dangereuses*, op. cit., p. 210. 『危険な関係』前掲書、上、263 頁。

侯爵夫人のこと]の社会的死をもって終わるこの小説は、その人物像の解釈をさらに困難にしている。はたして、女リベルタンには、「欲得ずくの性格をもつ〈娘 fille〉の不名誉な役割か、みずからを男根化することで女性という性にのしかかる社会的・生物学的法則から逃れているだけにおさら称賛に値する超女性の役割」のいずれかしか選択肢はないのだろうか²⁷⁾。

M.M.についても同様である。カサノヴァは、1753年にヴェネツィアの修道院でM.M.に出会う。文通が始まり、次に秘密の関係が、肉体と精神の快楽に捧げられた色恋の館である「小屋 casins」で数ヶ月にわたって持続する。M.M.は『わが生涯の物語』で、カサノヴァの女性の分身 *alter ego* として現れる。「色恋の知者²⁸⁾」である彼女は、快楽の教養と「リベルタンの礼儀作法²⁹⁾」の達人とみなされている。欲望の主体として十全に行動し、享楽の能力の洗練された使用法を体現しているのだ。さらに、彼女は無神論者である。この若い修道女は、自分の足跡を消し、カテゴリーを無効にする。語り手であるカサノヴァは、彼女を当初から「謎³⁰⁾」として提示している。女性が依然として社会的な制約に大いに服従させられている世界において、彼女は大胆さにおいて際立っている。語り手は、昔をふり返って驚く。「あれほどの自由は想像さえできなかった³¹⁾」と。何よりも、彼女は男性性と女性性の二分類からほとんど逃れている。彼女の愛人たちは、彼女のなかに「女性の繊細さ³²⁾」を上回るエロティックな活力を見出している。彼女は男装を楽しむ。また、カサノヴァの分身として、さらには彼のライバルのようにして、彼の愛人であるC.C.（彼女も修道女である）と同性愛的関係を結ぶ。しかしながら、社会的制約が女性のリベルティナーージュのユートピアに終止符を打つことになる。というのも、M.M.が自由を手にするのは、権勢家の愛人ベルニス枢機卿（ヴェネツィアのフランス大使）の力のおかげだからだ。1755年1月にこの人物が去ると、自由に吊鐘が鳴らされ、そのはかなさを裏付ける³³⁾。

性暴力

性暴力の表象は、近年の問題の中心にある。多くの研究が、「強姦文化 レイプ・カルチャー culture du viol³⁴⁾」のさまざまな形式の探索を行ってきた。文学はまさにその「反響室 エコー・チェンバー」

27) Anne Richardot, «Introduction», *Femmes et libertinage au XVIII^e siècle*, op. cit., p. 11.

28) Casanova, *Histoire de ma vie*, op. cit., t. I, p. 754.

29) 次を参照：Michel Delon, *Le Savoir-vivre libertin*, Paris, Hachette Littératures, 2000. 邦訳：ミシェル・ドゥロン『享楽と放蕩の時代 18世紀フランスを風靡した背徳者たちの夢想世界』稲松三千野訳、原書房、2002年。

30) Casanova, *Histoire de ma vie*, op. cit., t. I, p. 757.

31) *Ibid.*, p. 756.

32) *Ibid.*, p. 799.

33) [訳注] M.M. はベルニスに捨てられ、カサノヴァにも見放されて、重病に冒される。この人物は男女間の境界線に疑問を投げかけるが、ここでもやはり女性という条件によって課せられた社会的制約に服従させられている。

34) [訳注] レイプ・カルチャー：強姦の罪を小さく見積もったり、強姦を促進したりするような社会風土のこと。

chambre d'écho³⁵⁾」とも言える³⁶⁾。このような活動は、現代の課題を把握し、過去のテキストに対するわれわれの見方を更新するように誘う。リベルタンのテキストでは、ひとつのシナリオが反復される。男性が誘惑し、女性が抵抗し、ついで女性が「欲望の法則」に服従することで、男性が免罪されるように見える、というシナリオだ。ただし、多数の差異も認められるゆえ、これらの場面に異なった視線を導入したくなる。

『危険な関係』の第96信で、ヴァルモンはメルトゥイユに、自分がセシル・ド・ヴォランジュに対して行った乱暴について報告する。彼はセシルが眠っている間に寝室に入りこみ、彼女が未経験であることに乗じて、この「獲物 *proie*」をおのれの「威力 *autorité*³⁷⁾」によって「屈服させた」ことを自慢する。この語りは、リベルタンの「好機 *moment*」のトポスについてのひとつのパターンを提示する。「機会の力 *la puissance de l'occasion*³⁸⁾」、好ましい諸状況、攻撃者の大胆さが、あらゆる乱暴行為を正当化するという好機だ。ここには、攻撃と防御、策略と抵抗という古典的なイゾトピー *isotopie*³⁹⁾が認められる。おのれのもつ手段と力関係を自覚するシニカルなヴァルモンの肖像が描かれ、一方で、リベルタンの想像のいたるところに見られる台本が展開される。犠牲者は当初は躊躇し、さらには抵抗するが、やがては合意する。ヴァルモンはそこに「普遍的法則」を確認するのだ。

するとどうでしょう。ただそれだけの手で、恋の女は男への誓いを忘れてまず屈服し、とどのつまりはうんと言ったのです。もっともそれから、まともや恨みごとと涙がそろってやって来ました。まことかうぞか、そこは知りません。ただ私がふたたび怨みごとと涙をさそうような仕事にかかる、ご多分にもれずそれはとまってしまうました。ままよ、いけません、いけません、ままよ、けっきょくお互いに十分満足し、しかも今後のあいびきまでしめし合わせて別れました⁴⁰⁾。

ここには未解決の曖昧な点がある。はたしてセシルは策を弄しているのだろうか。つまり抵抗するふりをしているのだろうか。この文章は、登場人物の声を示すことで、解釈の幅をもたせている。この手法は、テキスト内で女性の合意が話題となっているときにくり返し用いられる。第125信にも同様の曖昧さが認められる。

35) [訳注] エコー・チェンバー現象：自分の意見や思想が肯定される環境にとどまることで、それが正しいと思ひこむ現象。

36) たとえば次を参照：«Désir, consentement, violences sexuelles en littérature», journée d'études organisée par Lucie Nizard et Anne Grand d'Esnon en janvier 2019 ; «Scènes de viol dans les littératures européennes (XVI^e-XVIII^e siècles)», colloque international organisé par V. Lochert, Zoé Schweitzer et Enrica Zanin en octobre 2023.

37) Laclos, *Les Liaisons dangereuses*, *op. cit.*, p. 253. 『危険な関係』前掲書、下、25頁。

38) *Ibid.*, p. 255. 『危険な関係』前掲書、下、29頁。

39) [訳注] テキスト理論の用語。グレマス Algirdas Julien Greimas が提唱した概念で、メッセージあるいはテキストに認められる意味のつながりの一貫性。

40) Laclos, *Les Liaisons dangereuses*, *op. cit.*, p. 256. 『危険な関係』前掲書、下、30頁（傍点引用者）。

ここでヴァルモンはメルトゥイユ侯爵夫人を相手に、いかにトゥールヴェル夫人を「征服 vaincre」し、「所有 posséder」することに成功したかを説明している。

そしてそう言ったかと思うと、私の腕の中に飛びつく、というよりは気が遠くなってたおれかかりました。こんなにうまくいこうとは嘘のようで、私は大いに驚いたふりをしました。しかし驚きながらも、勝利の場所としてきめておいた場所へ夫人をつれていく... というよりもむしろ運んで行ったのです。そして事実夫人が意識を取りもどしたときには、夫人は幸福な征服者に屈し、すでにその手中に落ちていたのです⁴¹⁾。

二つの換言法 épanorthose⁴²⁾（「私の腕の中に飛びつく、というよりは気が遠くなってたおれかかりました」、「きめておいた場所へ夫人をつれていく... というよりもむしろ運んで行ったのです」）は、正反対の解釈の可能性を示している。すなわち、おのれの欲望を隠す女による偽りの抵抗という解釈と、その反対の単なる気絶という解釈である。

一方、省略法 ellipse は、強姦を表象の空間の外部に置いておくことに貢献している。上の引用の続きは、その解釈を複雑にしている。トゥールヴェル夫人のふるまいは、いかなる快樂の印も露わに示さないことで、シナリオの定型的な展開を信じ切っているリベルタンの期待を裏切っているからだ。

これほどの大事件ですから、お定まりの涙や絶望なしに済まないことは予期していました。そして始めの間、普通よりは少し狼狽したような、深く考えこむようなところが見えたのも、ともにいわゆる貞女の貞女たるゆえんだと思いました。[...] ところが相手の抵抗の仕方ときは実は空恐ろしいほどでした。抵抗が極端であるというよりは、むしろ抵抗の示しかたが恐ろしかったのです⁴³⁾。

つまるところ、リベルタンの自己称賛を目的としているはずの語りのさなかにおいてさえも、暴力がありのままに表示されているのだ。こうして、暴力は当初の計画の失敗を示す（このことは第 110 信で簡潔に示されている：「あの女をわがものにするだけでは足りません。向こうから進んで身を任せるようにしたいのです⁴⁴⁾」）。

第 125 信の末尾は、[性暴力の] 数々のもっともらしい言い訳の虚偽性を暴き、ヴァルモン自身が紋切り型であると自覚するレトリックの効果を疑問視するよう

41) *Ibid.*, p. 349. 『危険な関係』下、147-148 頁。この手紙の解釈については、次も参照のこと。M. Slaviero, «"Vous vouliez bien attendre que j'eusse dit oui, avant d'être sûr de mon consentement!". Sur un viol dans *Les Liaisons dangereuses* : analyse critique et enjeux méthodologiques», en ligne : <https://malaises.hypotheses.org/author/melanieslaviero>

42) [訳注] すでに言ったことを訂正してもっとふさわしい表現に替える技法。

43) *Ibid.*, p. 350. 『危険な関係』前掲書、下、148-149 頁。

44) *Ibid.*, p. 303. 『危険な関係』前掲書、下、83 頁。

に誘う。

私は紋切り型のきまり文句を並べました。その中の一つ、「あなたは、私を幸福にしてくださいだったので、それで絶望なさるのですか」。この言葉をきくと、夫人は私の方へ向き直りました。顔つきはまだ少し変でしたが、しかしすでにいつもの清らかな表情をとりもどしていました。「あなたの幸福！」夫人は私に言いました。私の返事は申さずともおわかりでしょう。「ではあなたはお仕合わせなのでございますか」私は重ねてそうであることを明言しました。「そして私のために幸福におなりなすったのでございますね！」。私は贅辞と優しい言葉を付け加えました。私の話している間に、夫人の手足はしなやかになりました。夫人はふたたびぐったりと脇掛椅子にもたれかかり、私の握った手をそのままにしていきました。「そう思うと気が軽く、楽になります」⁴⁵⁾

『カサノヴァ：パロディ喜劇』（1918年）の第一幕で、アポリネールは主人公を「明朗で優しい愛人」の化身とみなしている⁴⁶⁾。このヴェネツィア人の恋愛沙汰を陽気で無邪気なものと位置づけることで、悲劇的な情念や攻撃的な誘惑とは縁遠いものとした。実際、『わが生涯の物語』の大部分は、悲劇性を脱した性活動のイメージから成り立っている。カサノヴァは好んで、したたか者の捕食や策略と、「残酷さとは無縁のリベルティナーージュ *libertinage sans cruauté*⁴⁷⁾」や、理想的なエロスの協力関係に基づいた恋愛の作法とを区別している。ただし、この自伝的語りの多くのページで、享楽における両性の平等を擁護し、快楽の善用とは相容れない暴力を拒絶しているとしても、カサノヴァが強姦の問題とまったく無縁というわけではない。好都合な立場を悪用するにせよ、「好機 *moment*」を逃さないにせよ、女性の不意をついてもものにするにせよ、『わが生涯の物語』の複数のエピソードは、リベルタンの想像力と不可分な「性的衝動の秘めたる魅力⁴⁸⁾」を明示しているのだ。

しかし、戸惑うことに、カサノヴァの自伝物語のなかの強姦の場面は、コミカルな、あるいは道化的な場面に転化する。暴力が明示的に語られるまさにその瞬間に、笑いが暴力を回避しているのだ。ここでの笑いとは、快楽の法則に屈服するよう誘われた主人公とそのパートナーの笑い、物語内容 *diégèse* の内部における誘惑者と第三者的共犯者との黙認の笑い、あるいはまた、「よき」読者（序文からして著者による「脱線行為 *fredaines*⁴⁹⁾」を楽しむように誘われる読者）を対象としたユーモラスな手順である。ここでは、とくに顕著な例をいくつか挙げるにとどめる。

45) *Ibid.*, p. 351. 『危険な関係』前掲書、下、149-150頁。

46) Guillaume Apollinaire, *Casanova, comédie parodique*, Paris, Gallimard, 1952, acte I, scène 5, p. 26.

47) Chantal Thomas, *Casanova. Un voyage libertin*, Paris, Denoël, 1985, p. 201.

48) Pierre Hartmann, «Le motif du viol dans la littérature romanesque du XVIII^e siècle», *Travaux de littérature*, n° 7, 1994, p. 223-230, p. 224.

49) Casanova, *Histoire de ma vie, op. cit.*, t. I, p. 5.

『わが生涯の物語』の第一巻に記されているパゼアーノ村での嵐の場面には、男根の力に対するあからさまな自己満足と武力行使の脱悲劇化が混在している。カサノヴァ青年は若き花嫁を誘惑しようと決意し、彼女の好意を得ることに骨を折る。色恋の結末は、二人一緒の馬車旅行の最中に激しい嵐が発生したことによって可能になる。悪天候のおかげでカサノヴァは、雷への恐怖のために身動きができなくなったこの女性をうまくかどわかすことができたのだ。

コートを着せ直そうと彼女に近づくと、彼女はみずから私の体の上に身をまかせたので、私は彼女に素早く馬乗りになった。彼女はこれ以上ないほど絶好の位置にいたので、私は時間を無駄にすることなく、即座に私のズボンのベルトに時計を装着するふりをして、自分の体を彼女にくっつけた。すぐに私を止めないと自分を守れないと悟って彼女は力を込めたが、私は彼女に「気を失ったふりをしなければ、御者が向きを変えてすべてを見るでしょう」と言った。そう言いながら、彼女に好きなだけ私を不敬者と呼ばせ、彼女のお尻をしっかりとかみ、巧みな剣闘士がこれまでに得た最も完全な勝利を取めた⁵⁰⁾。

女性は、男性の大胆さに身をゆだねさせる状況に流されやすく、社会のまなざしにも服従しているために、力の行使に直面しても受身の姿勢を継続せよとの脅迫に屈せざるをえない。「大地と元素を揺るがそうと」しているように見えながらも、「何ごともなく収まり、空は穏やかになり、空気はさわやかになり、たいい害よりも善を引き起こす⁵¹⁾」イタリアの嵐と同じように、この回想記筆者の目には、色恋はその根本的な無邪気さによって特徴づけられる。道徳的・宗教的法則は揺るがされ（姦淫、冒瀆）、暴力が行使されたが、このエピソードは結局のところ、攻撃的な要素を中和する遊び心のある対話で終わる。

「私を許すと言ってください。私といて嬉しいと教えてください。」——「はい、もちろん。お許しいたしますわ。」——そこで私は彼女の涙を拭い、私に対しても同じように正直になってほしいと頼むと、彼女の口元に笑いが浮かぶのが見えた。[...] 彼女を座席にもどし、雨が止んだのを見ると、「御者は一度もこちらをふり返りませんでしたよ」と確言した。さきの出来事について冗談めかして語りながら彼女の手にキスをし、こう告げた。「きっと雷への恐怖は癒やしてあげられたでしょう。でも、その癒やしの原因となった秘密は誰にも明かさないでください。」二人の笑いに御者の笑いが加わった。この第三者も、こっそりとさきの場面を眺めて楽しんでいたので。「彼も笑ったわ。」——「何を笑っているのだね？」——「ご存じでしょうに⁵²⁾。」

50) *Ibid.*, p. 110.

51) *Ibid.*

52) *Ibid.*, p. 112.

第三巻で洗濯屋の娘に対してなされる行いは、戦術のまた新たな変更を示している。カサノヴァは、この娘と「対話するのは不可能」だと見て取り、「場合によっては少しは乱暴してでも、不意をついて彼女をものにしようと決心した」。彼は奥まった階段の下から彼女を見張り、手の届く場所に來たとたんに彼女に飛びかかり、「なかば優しく、なかば強引に [...] 屈服させた⁵³⁾」。動物の暗喩（「ネコ」と「ネズミ」）が両者の捕食関係を明示しているが、それでいて語りは同時に野蛮さと誘惑との境界を曖昧にしている。さらに、このエピソードの攻撃的な内容は、下腹部に関わるコミカルな要素が突如発生することで即座に緩和される。自分が「さっきまで入っていたすぐ隣の場所 [尻の穴のこと] から [...] ものすごい音が聞こえてきて」、このヴェネツィア人の「愛の狂乱」が抑制される。「音楽の動きに合わせて拍子をとるオーケストラの低音⁵⁴⁾」に似た尻の音に驚愕し、同意なき浮かれ騒ぎ [性行為のこと] はグロテスクなものに転じる。このエピソードに関して回想録筆者が保持しているのは、彼とともに楽しむ読者に捧げられた哄笑だけである。

私は笑いが止まらず、その場所に四半時ほどとどまった。この日以来彼女は私の目の前に姿を現さなくなった。今でもまだ、この出来事を思い出すと、笑いがこみ上げてくる。臨終の時ですらこれを思い出せるなら、きっと笑ってしまうだろう⁵⁵⁾。

笑いと無邪気さのカサノヴァとは打って変わって、『わが生涯の物語』の続きに登場するシャルピオン（ロンドンで知り合った若い遊女）のエピソードは、不安をかき立てる。カサノヴァはまず、この若い娼婦のためらいを、合意のもとでの「抵抗」ととらえ、「まったく悪い兆候ではない⁵⁶⁾」と判断する。だが、彼女のたび重なる拒絶により、彼はやがて「より野蛮な暴力⁵⁷⁾」を行使する。殴る、首をしめる、レイプ用椅子を使用する、などであるが、とうとう彼はそうした手段を放棄する。結末ではこうした危機が「いたずら *espièglerie*⁵⁸⁾」として象徴的に描かれるのだが、それでもこのエピソードは、潜在的な暴力を印象的な仕方で再び語っている。理想的な両性の平和な関係とは正反対の、狂乱の域に達する攻撃性や強姦へのおぞましい誘惑を明示しているのである。断絶の様態のもとに生じたこの出来事は、ひとつの極限的な経験であり、主体が自己を喪失し、殺害の衝動に囚われる。今後は、このような仕掛けが読者にいかなる効果を及ぼすかについて検証しなければならないだろう。登場人物の男女間に合意がなかったと解釈する可能性を示すことは、暴力の語りに対して安易に賛同する姿勢を拒否することにつな

53) *Ibid.*, p. 588.

54) *Ibid.*

55) *Ibid.*

56) *Ibid.*, t. III, p. 104.

57) *Ibid.*, p. 115.

58) *Ibid.*, p. 156.

がり、リベルタン文学の見落とされてきた側面を発見することになるかもしれない。

抵抗と合意

18世紀は、ジョルジュ・ヴィガレロが『強姦の歴史』で「合意への確信」と呼んだ事態にとってもよく適合する。すなわち、「女性が積極的に身を許した」という信念、「完全な強姦とは合意の上での強姦である」という「揺るぎない信念」のことである⁵⁹⁾。百科全書の項目「強姦 Viol」には、次のような規範となる記述がある。すなわち、強姦があるためには、「女性が身を守るための」「強い抵抗と我慢」が明確に確認できなければならない、しかも「その抵抗は最後まで持続する必要がある。なぜなら、最初の抵抗だけでは強姦にはならず、この犯罪に適用される罰にも値しないだろうからだ⁶⁰⁾」。

ここで、ルソーが『エミール』第五巻で、とりわけ「愛の営み」に関する男女の社会的役割の違いについて考察した際に宣言した次のことがらを想起することもできるだろう。

そういうわけで、女性は、男性と同じ欲望を感じていてもいなくても、また、男性の欲望を満足させてやりたいと思っていてもいなくても、かならず男性をつきのけ、拒絶するのだが、いつも同じ程度の力でそうするのではなく、したがって、いつも同じ結果に終わるわけでもない。攻めるほうが勝利を得るためには、攻められるほうがそれを許すか命令するかしなければならぬ。攻撃する者が力をもちいずにはいられなくするために、攻撃される者はどれほど多くのたくみな方法をもちいることだろう⁶¹⁾。

ここで女性は、本質的に策略を用いる存在として描かれている。被害女性は、暴力を意図的に刺激したと非難されることで、自分自身が被害の原因であるように見られるのだ。

ところで、性的合意の問題は、リベルタン文学に対する現代の批判的再解釈の中心課題となっている。そこに描かれる多くの場面の（これまでの読解と逆のとはまでは言わないまでも）両義的な性格が指摘されている。リベルタン文学のシナリオで最もありふれたもののひとつが、男と女の対立を、性行為に対するそれぞれの想定された関心に応じて描き出すものであった。そこでは、女はノンと言い、男はそれを聞き流すか、相手がウイと言ったと言い張るのである。つまり、台本の進行は、役柄や状況をよく理解し、結果的に女性を「正当にもあたかも暴力に

59) Georges Vigarello, *Histoire du viol. XVI^e-XX^e siècle*, Paris, Seuil, 1998, p. 53. ジョルジュ・ヴィガレロ『強姦の歴史』藤田真利子訳、作品社、1999年。

60) Article « Viol », *Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers par une société de gens de lettres*, Paris, Briasson, David, Le Breton, Durand, 1751-1772, t. XVII, p. 310.

61) Rousseau, *Émile ou de l'éducation*, in *Œuvres complètes*, éd. B. Gagnebin et M. Raymond, Paris, Bibliothèque de la Pléiade, 1969, t. IV, p. 695. ルソー『エミール』今野一雄訳、岩波文庫、1962年、下、9-10頁。

屈したようにふるまわせる⁶²⁾」(カサノヴァ『わが生涯の物語』)ことに帰着する。しかしながら、このような恋愛の社会的合意の限界の定義に失敗すると、男性の登場人物に際限のない横暴を許してしまう。

クレビヨンの『炉辺の戯れ *Le Hasard au coin du feu*』の公爵が直面した問題がそれである。彼は、少なくとも両義的に取れる言い訳の末に、おのれの暴力を「無難な」戦略だったとして正当化する。

驚きがあとに続いたり、そこに怒りがともなう女性もいれば、あらゆる能力が停止してしまう女性もいる。そして、そんな女性には、予期せぬ無謀なふるまいも、あえて望まれないものではあっても、さほど危険なものではないことは否定できないと思われる。それゆえ、女についてどう考えればよいかを知っているならば、相手が屈服されたいがために攻められることを望む場合しか、攻めてはならないのだ。そうなってこそ男も女も等しく利益を得るのだ。しかしながら、たいていそうであるが、かくも重要なことがらが問題なのに、偶然にまかせて進んだり、偶然にすべてをゆだねてしまっていると、無謀さと慎重さとをどのように適切に使い分ければよいのだろうか。[...] 私には、人が女性を手に入れる方法と同じ方法で女性を失うことがよくある。そこで私の意見は、女性たちのもとでは、つねに同じ仕方で攻めるのが最良だということだ⁶³⁾。

抵抗と合意という対立を最初に正当化するのは社会秩序である。実際、リベルタンのテキストは、女性の欲望の明白な表現を圧迫する社会的束縛の反映である。この意味で、力関係によって女性たちは品位ある墮落を提供する。強制は策略にすぎず、実のところそれは男女双方によって受け入れられている、というわけだ。クレビヨンは『あく取り *L'Écumoire*』で単刀直入に言う。

つまるところ、誇り高く屈し、弱さのなかに偉大さを置き、品位をもって墮落しなければならぬ。そして、自分の混乱について考える際には、自分に言い訳できるようにしなければならぬ⁶⁴⁾。

同様の考えが、メルトゥイユ侯爵夫人の手紙にもうかがえる。慣習の圧力に屈して、女性の欲望の印は、欺瞞的で暗号化されたものとなる。「いかに身をまかせたく気があせっても何か口実はあるものです。ところで男の暴力に負けたように見える口実ほど女に都合のよいものはありません⁶⁵⁾。」こうして彼女は、第85信で、プレヴァンとの交際のなかでの男女に割り当てられた役割を次のように明示

62) Casanova, *Histoire de ma vie*, op. cit., t. II, p. 413.

63) Crébillon, *Le Hasard du coin du feu*, in *Œuvres complètes*, éd. J. Sgard, Paris, Classiques Garnier, 2000, t. II, p. 666-667.

64) Crébillon, *Tanzai et Néadarné*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. I, p. 386.

65) Laclos, *Les Liaisons dangereuses*, op. cit., p. 35. 「危険な関係」前掲書、上、第10信、40頁。

する。

ただ注意していただきたいのは、私が防衛を装って実は精一杯、彼を助けていたということです。彼に話す暇を与えるためには当惑の色、言いこめられるためにはまずい理由、ふたたび誓いを立てさせるためには恐れと警戒 [...]。しかし私の承諾を少しでも本当らしく見せるために、私はすぐそのあとから、やはりやめにすると言い出しました⁶⁶⁾。

もっとも、ラクロは女性が誘惑の図式に甘んじる仕方を女性の視点から示したわけだが、この選択には問題が生じる。メラニー・スラヴィエロが指摘するように、「採用される視点によって、女性登場人物のふるまいの解釈は逆転する可能性がある」からだ⁶⁷⁾。「抵抗」を正当化するために挙げられる別の理由は、エロチックなものでありうる。ほどよい性的な逸楽に、共謀による遊戯、暗黙の了解からくる喜びをまぜあわせることで、快楽がさらに増大するからだ。しかしながら、すでに予見できるように、合意から距離を置くこのようなリベルタンの戦略は大きな問題をはらんでいる。

とりわけ、今日 [リベルタンのテキストの] 多くの場面で不調和な徴候が目につきはじめ、一元的な解釈が困難になってきている。では、そのような語りの場面あるいは対話の場面で、何を読み取るべきだろうか。社会的な慣習という制限にもかかわらず、男女の欲望は一致していると見るべきだろうか、それとも逆に、[男性が] 女性の合意などどうでもよいとみなしていることの証拠を認めるべきだろうか。女性の抵抗は、礼儀と快楽への希求との調整を可能にする慣習に属するのだろうか、それとも、強姦の旧体制によって生じた抑圧の成果物だろうか。女性の抵抗のなかに偽装を認める態度は、陽気で共謀的で開放的なリベルティナーージュという観念を是認するのに貢献するだろう。それに対して、拒絶は心底からのものだという仮説に従うなら、支配、暴力、強姦というリベルティナーージュの観念へと傾くだろう。そして、フィクションや自伝的テキストの内部においても、男性登場人物は、このような解釈の揺れを十全に意識しているように思える。

こうして、リベルタン文学の多くの作品は、正反対の解釈の可能性を内包している。そうした解釈は、複数の視点の作用や、リベルタンのシナリオと呼ぶものものの曖昧さや動揺に大きく依存している。いまやリベルタン文学は、自己弁護を行いつつも、しばしばその正当性をみずから疑問視し、問い詰める要素を含んでいるように見える。そこには、潜在的な批判力ときわめて先鋭な現代性が付与されているのである。

(エコール・ノルマル・シュペリール・リヨン准教授)

66) *Ibid.*, p. 225. 『危険な関係』前掲書、上、第 85 信、283-285 頁。

67) Mélanie Slaviero, «Vous vouliez bien attendre que j'eusse dit oui, avant d'être sûr de mon consentement». Sur un viol dans *Les Liaisons dangereuses* : analyse critique et enjeux méthodologiques», *art. cit.*